

Dr. Goodwood's Locum
1951
by John Rhode

目次

代診医の死

7

訳者あとがき

273

解説 林 克郎

286

主要登場人物

アラン・グッドウッド	パタム在住の医師
ローズ・グッドウッド	アランの妻
パトリシア・グッドウッド	アランの娘
チャドリー夫妻	グッドウッド家の使用人
ステイヴン・ソーンヒル	グッドウッド医師の代診医
ジョン・ソーンヒル	ステイヴンの父親
メアリ・ハンポール	薬剤師
トム・ウィルステン	サブワース・プレイスの当主
クレア・ミルボーン	トムの妹
ラヴロック	ウィルステンの顧問弁護士
C・J・デリントン	パタム在住の医師
ポンフレット夫人	グッドウッド医師の患者
ベティ・ヴァーノン	その姪
アーネスト・ブラッグ	マスプロ車の購入者
コルベック	自動車修理工

- ノープス……………パタム駅の赤帽ポイター
 ジャーヴィス……………ケンマイル駅の手荷物係責任者
 ロザラム……………作家
 ナクトン夫人……………下宿屋の女主人
 バートラム・C・リングウッド……………ニュージーランドの牧羊業者
 ジェームズ・ワグホーン……………スコットランドヤード犯罪捜査課警視
 キング……………スコットランドヤード犯罪捜査課巡査部長
 フェアロップ……………チルカスター州警察本部の警部
 マルベリー……………ケンマイル駐在の巡査部長
 ニューステッド……………パタム警察署の警視
 ハワード……………パタム警察署の巡査
 ランスロット・プリーストリー……………数学者
 ハロルド・メリフィールド……………プリーストリーの秘書
 ハンスリット……………元スコットランドヤード警視
 オールドランド……………引退した医師

代診医の死

本書はフィクションであり、本書に登場する人物、出来事は、すべて架空のものである。

第一章

アラン・グッドウッド医師は、妻ローズとゆとりのある暮らしを送っていた。彼らの家、ブルックウエイは、パタムという、市の立つ小さな町のはずれにあったが、控え目ながらも豊かさがいたるところにじみ出ていたし、庭に素晴らしい花の彩りが絶えることもまずなかった。診療業務が流行っていることに加え、医師夫妻にはそれぞれ自分の収入があったからだ。二人とも中年の域に入っていたが、活発で精力的な人物だった。

精力的という形容辞は、アラン・グッドウッドにあてはめる場合、多少修正を要するかもしれない。彼はずっと屋外スポーツに情熱を注いできたし、自慢の一つといえば、病院勤務時代にラグビー選手をしていたことだ。今でもゴルフに熱を入れていて、一日に二ラウンド(二ラウンドは十八ホールプレイ)回つても平気だった。しかし、職業という点では、その精力もさほど顕著ではない。人気のある医者ではあったが、患者からは、手抜きしがちだと陰口をたたかれることもある。手抜きと言わぬまでも、患者の病気を自然に治るにまかせてしまうことがよくあるのだ。たぶん、重い病気なら、時間と集中力を傾けるのにやぶさかではないのだろうが、ほとんど患者の思い込みとしか思えない、つまりぬ病には付き合っていないのだろう。

一人娘がいるが、親が期待するほど実家には帰ってこなかった。パトリシアは二十代だったが、自

分の面倒は自分で見られる娘だ。ケンブリッジ大学に学んだが、役に立ちそうなことはさほど習得してこなかったものの、友人だけはたくさんつくってきた。小さな田舎町での人付き合いが退屈で我慢ならなかったとしても仕方あるまい。それはともかく、時おりブルックウェイに短期間滞在するほかは、いつもいろいろなところを巡り歩いていたようだ。

グッドウッド医師夫妻は、例年、休暇を取る習慣があった。たいていは秋で、ひと月以上を休暇で過ごす。医師は今年、ヨークシャーで狩猟を行う団体の会員になっていた。こういうときは、診療業務は代診医に委託する。代診医はブルックウェイに住み込み、グッドウッド夫妻に長年仕えてきたチャドリー夫妻が、その身の回りの世話をする。代診医はいつも慎重に選抜された。職業上の能力水準が高いことはもちろん、必ず独身男性でなければならなかった。グッドウッド夫人は、独身男性が予備の部屋を使うことに異論はなかったが、自分の不在中に、女に家の中をうろつかれるのは許せなかったし、チャドリー夫妻もきつと困惑しただろう。

医師がいつも使う募集方法は、医学雑誌に広告を載せることだ。今年は二、三人の応募があり、医師はその中から一番見どころのある人物を選んだ。ステイーヴン・ソーンヒル、王立外科医協会会員にして、王立内科医協会からの資格授与者、歳は三十二、ロンドンのイースト・エンドにある大きな診療所の一員だ。田舎でひと月過ごせるチャンスがありがたいと言う。何度か手紙のやりとりをし、その中にはグッドウッドが常に求めていた推薦状も含まれていて、手はずは整った。グッドウッド夫妻は、十月十二日の木曜日から休暇に入ることになり、ソーンヒルは、その前日の晩、七時十二分着の列車でパタムに到着する予定だった。

十一日水曜、グッドウッド夫妻は、ブルックウェイの客間で一緒にお茶を飲んでいた。「七時十二

分着の列車にしてくれたのはありがたいな」と医師は言った。「実に都合がいい。診療が終了してから、車で駅まで行けるからな。それなら、夕食をとってから打ち合わせをして、要領を教えてやれるよ。手紙からすると、とても品のいい若者のようだ。パットが家にいなくて、会わせてやれないのが残念だな」

「あなただったら！」と妻は異議を唱えた。「あの子を若い男と家に残したりなんかできますか」

グッドウッドはクスクスと笑った。「しつかり者のチャドリー夫妻が、お目付け役でいてモカ？どのみち、今どきの若者は因習になんぞとらわれんよ。パットだってそうさ。ソーンヒルがそうでなかつたら、むしろ驚きだよ」

「かもしれませんけど」とローズ・グッドウッドは応じた。「パタムの人たちが因習にこだわることは、よくご存じでしょ。大事な友人がたの中には、白い目で見る人もいそうですし。診療業務にだつて影響しますよ」

グッドウッドは肩をすくめた。「おいおい、起きてもない事態を言い立てたつて仕方ないだろ。それより、荷造りはみんな終わつて、朝ちゃんと出発できるんだろうな？ 診療時間のあいだにソーンヒルに指導をすませたら、すぐ出発するぞ」

診療所は、ブルックウェイではなく、その小さな町の「市場広場」にあつた。六時少し前に、医師はゆつたりとした快適な車に乗り、半マイルほど運転して診療所に行くと、いつものように、患者が列をなして待つていた。診療所の業務は、医療よりも事務のほうが中心になつていた。いろいろな書類にサインする仕事もある。グッドウッドはいつものように、優しくはあるが、多少ぞんざいな態度で患者の診察をした。最後の患者は、住民の中でも一番のお年寄りで、耳は遠いし、足がひどく不自

由な上に、くどくどと愚痴を垂れ流し続けるありさま。その患者の診察に予想以上に手間取ってしまい、お引き取り願ったときには、もう七時をまわっていた。グッドウッドは急いで車を走らせ、町から一マイル離れた駅に着くと、ちょうど七時十二分着の列車が駅に入ってきたところだった。

十二人ほどの乗客が下車してきたが、その大半は医師の知り合いか、少なくとも顔見知りだった。最後に出てきたのは男性で、そのあとを赤帽がスーツケースを二個運びながらついてきた。この男がソーンヒルに違いない。グッドウッドはすぐさま相手を品定めした。背が高く、頑健そうな体格。身なりもよく、色黒で、鬘甲縁のめがねの奥には知的な目が光っている。第一印象はいい。少しやつれて見えるが、無理もない。イースト・エンドでの診療業務はちよつとしんどいからな。それに、列車旅で疲れてもいる。夕食をとって、一杯やれば、きっと元気になるだろう。月の終わりには生まれ変わったようになっていさ。グッドウッドは歩み寄り、握手の手を差し出した。「ソーンヒル先生かね？」

「そうです」男が答えながら、二人は握手した。「グッドウッド先生ですね？ お出迎えいただき、ありがとうございます」

「なんのなんの」グッドウッドは快活に言った。「車が外にある。ノープスが荷物を運びこんでくれるよ。わしの車は知ってるな、ノープス」

「もちろんです」と赤帽は答え、スーツケースを運び、二人を改札口に通した。ソーンヒルは、ロンドン発の一等車席の往復切符から往路の半券を渡した。彼らが車のところまで来ると、ノープスが車のそばに立っていた。「スーツケースはうしろに入れました」と彼は言った。ソーンヒルはチップを渡し、グッドウッドの隣の席に座った。「出迎えに来てよかったよ」グッドウッドは車を発進させな

がら言った。「このあたりはいつもタクシーが待っているわけじゃないし、いても、たいていは他人に先を越されてしまう。それに、わしの家まではけっこうあるんだ」

「ご配慮ありがとうございます」とソーンヒルは応じた。「この土地は不案内なもので。この州に来たことはないと思います」

「きつと気に入るよ」グッドウッドは胸を張って言った。「田舎暮らしを満喫するつもりならな。仕事もそうしんどくはない。このあたりの住人は、実に健康な連中だな。だが、詳しいことは夕食のあとに話そう」

ブルックウエイに着くと、ソーンヒルはローズ・グッドウッドに紹介された。代診医に対する彼女の態度は、いつもなら淡泊で、血の通った人間というより、都合のいい穴埋め要員とみなすものだった。ところが、ソーンヒル医師に対しては、彼女も夫と同じ第一印象を持った。寡黙で上品なうえに、落ち着きがある。歳よりやや老けて見えるが、そのほうが好ましい、と彼女は思った。見た目が若すぎる医者、経験不足に見えるし、患者に心もとなない印象を与えるものだ。

グッドウッドが期待したように、ソーンヒルは、ウイスキーソーダを飲むと、目に見えて生き生きとし、夕食会は順調に進行していった。ソーンヒルは、イースト・エンドでの診療業務に加わる前に、船医として何度か海を旅した経験があり、訪れた土地について楽しいに語った。仕事の話は避けたいらしく、医師としての経験談は口にしなかった。グッドウッド夫妻は、彼のことをとても楽しい話し相手だと思ったし、初対面同士の気まずさもすぐに消えていった。

「わたしたちは明朝、出発するよ」グッドウッドは、食事が終わると言った。「そしたら、君の思うようにしたらいい。身の回りのことはちゃんと世話をしてもらえよ。必要なことがあれば遠慮なく頼

んでくれ。車を使つてもらえるように残していけないのは申し訳ないがね。ヨークシャーまで車で行く予定だし、着いてからも使うんだ」

「ご心配には及びませんよ」とソーンヒルは答えた。「車は役に立たないんです。運転を習ったことがないもので」

「それを聞いてホツとしたよ」とグッドウッドは言った。「ともあれ、別途手配をしておいた。この町には車の修理屋が一軒あるが、診療所のすぐ隣で、フェインズという気のきいた男が経営しているハイヤー業務もやつていてね。君が必要とするときに、いつでも手配してもらえよう、話をつけておいた。往診の必要な患者の中には、遠くに住んでいる者もいるからな。もつとも、それを言うならわしの自転車もある。わしもよく乗るんだよ。なかなかいい運動になるしね」

ソーンヒルはにつこりした。「あえて申し上げれば、むしろ自転車のほうに惹かれますね。一時期、よくサイクリングをしたものです。しばらくやつていませんが、また近いうちにはじめたいと思つてたんですよ」

それから数分ほど話したあと、ローズ・グッドウッドが席を立ち、「お二人でお話しなさりたいでしょ」と言った。「書齋に行かれたほうがいいわ、アラン。チャドリーがここを片づけたいでしょうから。私はしばらくなら客間にいますよ」

こうして、男たちは、食堂から、グッドウッドが書齋と呼んでいる部屋に移動した。といつても、そこにある書齋らしいものの痕跡といったら、テーブルの上にぞんざいに投げ出された医学雑誌が二、三冊に、ガラス戸付きの本棚に並んだ多数の専門書だが、そのガラス戸もめつたに開かれることはないようだ。なかでも目につくのは、銃器が詰まったガン・キャピネット、ゴルフクラブのバッグが数

個、さらには狩猟をテーマにした版画のコレクションだ。大きな暖炉に火はくべてなかったが、その晩は暖かかったからだ。暖炉の前には豪華な安楽椅子が二脚置いてあり、グッドウッドは客人にそこに座るよう促した。それから、隅の戸棚を開け、ウイスキーのデカンター、サイフォン、グラスを二個取り出すと、「さあ、これでくつろいで話ができる」と満足そうに言った。

彼は二個のグラスに飲み物を注ぎ、それぞれの手前に置くと、「どんな仕事を任されるのか、知りたいだろう」と、もう一つの安楽椅子に座りながら話を続けた。「業務の範囲という点ではかなり広域だな。数マイル四方に及ぶ。患者の大半は町なかに住んでいるが、周囲の村落に散らばって住んでいる患者も何人かいる。人口は全部で二千人ほどだ。パタムには、もう一人開業医がいる。デリントンという、なかなか感じのいい男でな。ハイ・ストリートに住んでいる。明日、場所を教えるよ。互いによく患者の受け持ちを分担して、良好な関係を維持している。お互いの縄張りに踏み込まんよう気をつけてるからな。

明日の朝見でもらうが、わしの診療所と調剤室は市場広場にある。わしの持ち家で、その一階部分だ。この家を買う前、若い頃は、そこに住んでいたのさ。家のほかの部分、ハンポール夫妻という夫婦者に貸している。デイック・ハンポールは、知りあってから何年にもなるが、町で店を構えているのだよ。しばらく前に結婚したが、わしにとっても、もっけの幸いでな。というのも、相手の女性は薬剤師の資格があつて、州庁所在地のチルカスターの薬品会社で働いてたんだ。形ばかりの賃料しか取らない代わりに、調剤の仕事をこころよく引き受けてくれて、一階もきれいに掃除してくれる。いい人だ。君も気に入るよ」

ソーンヒルはうなずいたが、口は差しはさまなかった。グッドウッドは、グラスを一口すすり、ま

た話を続けた。「明日の朝に診療簿を渡すよ。とりたてて重い病人はいない。どのみち、君ならしっかり対応できるさ。ただ、君も経験しただろうが、国民健康保健法が施行されてから、誰もが不調を訴えるようになったらしくてな。そんなのにまじめに対応する必要はないよ」

ソーンヒルは苦笑した。「ロンドンでの仕事も、なんでもありませんよ、と教え諭すことのほうが多いんです」

「そんなやり方は、ここではあまり役に立たんだろうな」とグッドウッドは言った。「田舎の連中は、教え諭せるような相手じゃない。当たり障りがなく、できるだけ苦い味がする薬の瓶を渡すほうが時間の節約だよ。ハンポール夫人なら、わしがよく使う薬の処方を知っている。彼女に、気休め調合薬〆と言えば、なんのことか分かる。連中はそれで満足するようだし、そうした代物を飲み尽くせば、それ以上は来なくなるものさ」

「定期的な往診が必要な患者もいるのではないですか？」とソーンヒルは訊いた。

「ごくわずかだよ」とグッドウッドは答えた。「君に分かるように、診療簿に書き込みをしておいた。だから自分で確認できるよ。いざというときに使えるハイヤーの手配をフェインズに頼んどいたのもそのためさ。そのうちの何人かは、少し遠くに住んでるんだ。たとえば、ブリックフォード・ハウスのボンフレット夫人だ。神経炎でほぼ寝たきりでね。君みたいなロンドンの開業医なら、そんな病気は特に珍しくもないと思うが。それから、ほぼ同じ方向に、サプワース・プレイスのトム・ウィルズデンがいる。友人でね」

「ウィルズデンですか？」とソーンヒルは言った。「聞き覚えのある名前ですね。どこかで耳にしましたよ」